

学校通信

2

2024 FEB.

第249号

学校生活における大切なお知らせです

学校長からのメッセージ

■能登半島地震とYMCA

関西も揺れた元旦、能登半島で地震。今年は本当に悲しい出来事からはじまりました。

YMCAはすぐに現地入りし、救援活動を行っています。2016年の熊本地震で、YMCAが運営する益城町運動公園が避難所の役割を果たした経験から、内閣府防災担当の要請もあり大阪YMCAの職員も現地で避難所運営を担っています。関西に残る私たちも“今、この場で出来る事”の一つとして、募金活動を行っています。

■阪神淡路大震災とボランティア活動

1995年の阪神淡路大震災は、私は救援活動の拠点となった西宮YMCAへ何度も応援に行きました。ボランティアとして現地に入る以上、現場に負担はかけられません。弁当持参、ゴミは持ち帰る、トイレは梅田で済ませて現地ではしない。そのようにして避難所の炊き出しや崩れた家から物を取り出す手伝いなどをしました。住む所や大切な人を失った悲痛、変わり果てた街の姿を目の当たりにして、私ができること、YMCAができることに精一杯取り組んだのを思い出します。

■東日本大震災と六甲山キャンプ

2011年の東日本大震災では、発達障害児が避難所で疎まれ、自家用車で寝泊まりしていると聞いて、いてもたってもいられなく、その子どもたちや家族のために4年間、「親子招待キャンプ」を行いました。六甲のキャンプ場で「今地震が起きたらどこに逃げるか」と子どもに尋ねるお父さん、放射線濃度を測定している福島の小学生、「避難所の運営を手伝っていたが、もう疲れ果てた」「畑を津波でやられて食べていけない」「子どものことも不安でいっぱい」「これからどう生きていいのかわからない」とそのような涙ながらの声をたくさんお聴きしました。

■祈りと支援を

今、能登の災害状況を見て、阪神淡路大震災や六甲山キャンプでお会いした方々の苦しみが重なり聞こえます。厳寒の中、能登の皆さんの一日も早い復興を心から願い、祈っています。そのための募金に皆様のご協力をどうかお願いいたします。

(校長 鍛治田千文)

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む。(ローマの信徒への手紙 5章 3~4節)





今月の聖句

「そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、『主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。群集は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、『主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。」

(マタイによる福音書 20 章 31 節)

イエスと大勢の群集がエルサレムに向かっている時でした。道端に座っていた二人の盲人たちが、イエスがお通りだと聞いて叫びだしました。普段は静かに道端に座っていた二人です。そこに彼らが居たことすら知らない人たちもいたでしょう。そんな彼らが、イエスが近くを通っておられるということを知った時、大声で叫びだしたのです。救いを求めて、癒しを求めて…それは彼らの命がけの叫びでした。

ところが、そんな彼らの叫びを、大勢の群集は黙らせようとしたのです。命がけで叫ぶ彼らを無理やりに居ないことにしてしまおうとしたのです。まるで、臭いものに蓋をするかのように。それはまるで私たちの心の中のように。自分でも見たくない部分から私たちは目を逸らしてしまうことが多いです。でも、そこには確かに救いを求めて時々大きな声で叫びだす自分がいるのです。その部分に、イエスは目を留めてくださり、救いと癒しを与えてくださるのです。

(日本キリスト教団 河内長野みぎわ教会 福島 義也 牧師)

